くの兵士が潜伏していたことであろう。

その後、ラーベはドイツに帰国する際、汪漢萬を使用人と偽って汽船に同乗させ、香港への逃亡を援助した。高級将校の潜伏と逃亡を幇助し、自己を凱旋兵と同一視するラーベ、それはまた中立地帯委員長の理性の倒錯を示す。

六十四日間の不法滞在中に何をしたのか

昭和十三年二月十五日、「昨晩、龍と周の二人が我が家を去った」とラーベは記す。六十四日間の不法滞在であった。日本軍の支那兵摘発は「徹底した包囲殲滅戦」（笠原十九司氏）からはほど遠かったのである。

龍大佐が「私と周の二人が負傷者の面倒をみるために残されました」と語っていたように、彼らは上官の唐生智の指示により計画的に残されたのである。しかし、それならば、彼らは赤十字病院の置かれた外交部に直行すべきであった。それが、ラーベの自宅に直行したのである。その目的は何であったのか。

そのことを考える上で、『ニューヨーク・タイムズ』の一九三八年（昭和十三年）一月四日付の記事は有力な手掛りとなる。阿羅健一氏にその記事の存在を指摘されて、同紙の南京関連記事を収録した『南京事件資料集①アメリカ関係資料編』を繙いてみたが、それは見あたらなかった。そこで、同紙のマイクロフィルムを見ると、「元支那軍将校が避難民の中に。南京の犯罪を日本軍のせいに。——

大佐一味が白状」という記事があった。以下に全文引用する（拙訳）。

《南京の金陵女子大学に、避難民救助委員会の外国人委員として残留しているアメリカ人教授たちは、①逃亡中の大佐一名とその部下の将校六名を匿っていたことを発見し、心底から当惑した。実のところ教授たちは、この大佐をその避難民キャンプで二番目に権力ある地位につけていたのである。

この将校たちは、支那軍が南京から退却する際に②軍服を脱ぎ捨て、それから女子大の建物に住んでいて発見された。彼らは大学の建物のなかに③ライフル六丁と、ピストル五丁、砲台からはずした機関銃一丁に、弾薬をも隠していたが、それを日本軍の捜索隊に発見されて、自分たちのものであると自白した。

この元将校たちは④南京で掠奪したことと、ある晩などは避難民キャンプから少女たちを暗闇に引きずり込んで、その翌日には日本兵が襲った風にしたことを、アメリカ人たちや他の外国人たちのいる前で自白した。

この元将校たちは逮捕された。戒厳令に照らして罰せられ、恐らく処刑されるであろう。》

傍点部②③が明白な戦時国際法違反であった。安全地帯には「武装解除された支那兵集団すら存在しない」（十号文書）とは国際委員会の繰り返す主張であったが、それは①のように真実ではなかった。

ところが、④の支那軍将兵の掠奪（りゃくだつ）強姦にかんする指摘がラーベの日記にはない。ラーベの署名す

る文書が収録された『南京安全地帯の記録』にもない。それはどうしたことか。委員長ラーベは日本大使館に毎日のように抗議に行きながら、④の記事については抗議せず、容認して黙殺し、終に、その事実を闇に葬ったのである。

反日攪乱行為に暗躍した支那軍将兵

上海のアメリカ系の英字新聞『チャイナ・プレス』一九三八年一月二十五日号が、南京ドイツ大使館公文書綴「日支紛争」に綴じてある。そこにも同じような記事が出てくる。

それによれば、十二月二十八日までに、将校二三名を含む一五七五名が安全地帯に機関銃やライフルを隠して潜伏しているのを摘発された。その中には、南京平和防衛軍 Nanking peace preservation corps 司令官王信労（音訳）がいた。彼は陳弥（音訳）という偽名で国際委員会の第四部門を率い、三人の部下とともに「掠奪、煽動、強姦に携った」。

他方、飯沼守少将の陣中日記（一月四日）が「八十八師副師長」を逮捕と記す当の第八十八師副師長馬跑香（音訳）中将は、安全地帯で「反日攪乱行為の煽動」を指揮していた。

そのような舞台裏を、安全地帯の避難民が垣間見ていたのであろう。掠奪、放火、強姦は支那軍の犯行と言う者すら現れる。

《支那人ノ或ル者ハ容易ニ掠奪・強姦及ビ焼打等ハ支那軍ガヤツタノデ、日本軍ガヤツタノデハ無イト立証スラ致シマス》